

続詞花集攷

——続詞花集と七卷本宝物集との一致歌をめぐって——

千古利恵子

宝物集の研究課題としては、諸本の位置づけ・成立時期・採集資料等、現在なお多くの問題が残されている。先学諸氏も、そうした問題について、すぐれた検証・考察をこころみていられる。さて、本稿では、宝物集と続詞花集との一致歌を調査・吟味した上で、宝物集の筆者がその編纂資料として続詞花集をどのように利用したか——続詞花集に収録された和歌をどのように解釈・鑑賞し、宝物集に撰入したのか——という問題について、若干の考察をこころみてみる。

キーワード：○続詞花集 ○宝物集諸本

I

宝物集諸本は、先学諸氏のご指摘のごとく、①一卷本系 ②二卷本系 ③平仮名古活字三卷本系 ④平仮名整版三卷本系 ⑤片仮名古活字三卷本系 ⑥第一種七卷本系 ⑦第二種七卷本系 に分類することができる。これら諸本のうち①一卷本系⑦第二種七卷本系の伝本を康頼自作のもの（一卷本系は第二種七卷本系の草稿とする）とみなす説が有

力である。^{〔1〕}そこで本稿では、⑦第二種七卷本系の伝本である吉川泰雄氏蔵本（新日本古典文学大系所収）・吉田幸一氏所蔵九冊本（古典文庫²⁵⁸所収）と続詞花集（新編国歌大観所収天理図書館蔵本）との一致歌を調べ、これら一致歌の本文の異同、続詞花集における部立等を次に表示、考察してみる。なお、新日本古典文学大系本には、「宝物集小見出し目次」が付されている。第二種七卷本系宝物集の論述内容を提示するために、この小見出しをも表示する。

〈表一〉

第二種 七卷 本系宝物集		新日本古典文学大系本 小見出し目次		釈迦堂参詣の道行		論 物 宝					
吉川泰雄氏蔵本	歌番号	初 句	7	24	32	35	40	41	48	命が宝 子は宝にあらず	
	吉 田 本										
	光長寺本										
	本能寺本										
	最明寺本										
	久遠寺本										
続 詞 花 集	歌番号	部 立	63	390	844	451	258	353	364	神祇 賀 秋下 釈教 雑中 哀傷 春下	
	第二種七卷本系宝物集（吉川泰雄氏蔵本）との本文異同										
	初句―わりなしや 二句―ほかにも・四句―一木が 四句―けふりになりし 五句―おもへ										
	三句―花なれば 二句―にほふ										
	作者―藤原政時										

						宝 法 が 仏															
						諸法空・諸行無常															
怨憎会苦		病苦		畜生道		飛花落葉		人命おぼつかなし		善女の四理		莊子の夢		維摩の十喻							
171	170	166	120	112	107	99	97	94	90	83	79	61	60	59	49						
恋しくは	おち滝つ	つくるとも	むねにみつ	おく山の	この比は	けふ見ずは	はかなさを	いづれの日	いつまでと	終夜	ながき夜の	君が代は	松の上に	宵のまに	柵取						
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	○	○						
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/						
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/						
○	/	○	/	/	○	○	/	○	○	○	/	○	/	○	/						
<hr/>																					
719	847	382	438	440	300	904	79	921	912	832	915	331	340	326	363						
旅	雑中	神祇	哀傷	哀傷	冬	雑下	春下	雑下	雑下	雑中	雑下	賀	賀	賀	神祇						
<hr/>																					
二句——とて		五句——あはぬ		四句——いくよを		五句——氷よ		初句——此北の		二句——けふこずは		二句——みずや		二句——前に		作者——藤原政時					
作者——前左京大夫教長												三句——てらす		四句——まだよぶかくも		五句——おもほゆるかな					

六														道	
人														道	
愛別離苦															
279	275	273	270	269	264	258	252	231	216	206	202	185	173	172	
虫のねは	思ひきや	かはくまも	かきつめし	思ひやれ	をくれても	人のうへと	たらちねや	玉章を	はるゝと	よひのまに	あけぬれど	萩の葉に	目をへつゝ	わがために	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/	/	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	
/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○	○	/	○	○	
398	387	429	423	433	415	416	419	33	708	598	550	279	721	849	
哀傷	哀傷	哀傷	哀傷	哀傷	哀傷	哀傷	哀傷	春上	旅	恋中	恋中	秋下	旅	雑中	
五句―なる心ちして		初句―かわくよも					四句―かはる				四句―袖さへ	五句―こよひばかりぞ	二句―ゆくに 三句―道なれ	三句―東路の	

示 開 門 二 十														
(12) 称念弥陀	(9) 臨終正念	(8) 観念 空観		(5) 発願	(4) 行業	(3) 持戒 不偷盜	(2) 三宝 帰依僧		(1) 道心 道心おこし難し					
427	407	402	401	373	365	345	330	329	315	314		285	284	280
ごくらくの	ほのゝと	色にのみ	我もなし	さ夜衣	千とせまで	さ夜ふけて	梅の木	けふひらく	たれとても	或はなく		ながき夜の	かなしさと	たれも皆
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	/		○	○	○
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		○	○	○
/	/	/	/	/	/	/	/	/	○	○		/	/	/
/	○	○	○	○	○	/	/	/	○	○		/	/	/
466	755	456	903	549	449	957	476	457	909	920		855	470	410
釈教	雑上	釈教	雑下	恋中	釈教	戯咲	釈教	釈教	雑下	雑下		雑中	釈教	哀傷
作者―山口重如女	二句―霞たちけん 五句―見てこし	三句―くやしきを		二句―露のへだては	三句―夢	二句―ぬすまはれなく			作者―賀茂成保	五句―いはむ		作者―小大君	三句―そのひとで 四句―今も 五句―ける	

前掲「表Ⅰ」に示した如く、第二種七卷本系宝物集（以下本稿においては七卷本と記す）と続詞花集との間には、五十二首の一致歌が認められる。²即ち、七卷本の収録歌四二八首の約二・一五％にあたる和歌が、続詞花集から撰入されていることとなるのである。次に、その一致歌五十二首について、七卷本に説くところと比較しつつ、吟味してみる。なお本稿に引用した七卷本の本文は、新日本古典文学大系所収・吉川泰雄氏蔵本によった。

・7歌「あやなしな」～61歌「君が代は」の詠について

「表Ⅰ」に示した如く、五十二首の一致歌中、7歌から61歌までの十一首の一致歌は、歌本文には異同の認められる場合もある。しかし七卷本筆者は、これらの十一首を七卷本に説くところに適した例歌とみなして、続詞花集から撰入したものであろう。（七卷本 P.6～P.44 参照）

・79歌「ながき夜の」の詠について

七卷本の筆者は、「仏法が宝」ということを説くために、「誠に一切の宝にはあふ事ありといへども、仏法の宝にはあふ事かたき也。」「諸法を空なりと観ずること、仏法の大意とは申とぞ承りしか。」と述べ、さらに「諸行を空と観じて、仏法を宝とおほすべき也。」と述べた上で、維摩経十喻に説くところをふまえた和歌五首を例示している。ところで、79歌「ながき夜の夢の中にて見る夢はいづれうつ、といかゞさだめん」の詠は、七卷本では維摩経十喻の作としてかけられてはいるが、続詞花集では、雑下に「題不知」として採られている歌である。七卷本の筆者は、この79歌を維摩経に説く「是身如夢為虚妄見」の⁴「此身如夢」をふまえた作であるとうけとめて、宝物集に撰入したのであろう。ところで、続詞花集・釈教には、維摩経十喻の詠を三首収録している。⁵七卷本の筆者が続詞花集を編纂資料として利用しているならば、続詞花集・釈教に収録されている次の和歌を維摩経十喻の例歌として撰入するの

が、より自然ではなかっただろうか。

此身如夢

赤染衛門

夢や夢うつつやゆめとわかぬかないづれのよにかさめむとすらん（続詞花・釈教46）

79歌「ながき夜の」の詠は、堀川百首・雑部の作で、歌題は「夢」。続詞花集の撰者藤原清輔は、この詠を収録するにあたって、堀川百首の部立を尊重し、続詞花集・雑下に排列したのであろう。そして、七巻本の筆者は、続詞花集・釈教に維摩経十喻を詠じた「夢や夢」の作が収録されているにもかかわらず、続詞花集・雑下に収録された79歌「ながき夜の」の詠を維摩経十喻とうけとめて、掲出しているのである。さらにいえば、七巻本の筆者は、この詠を、仏法とは「諸法は空と観すること」とふかくかわっているという立場に立つて解釈し、また、79歌をその例歌とみなして掲出したものと考えられる。茲に、続詞花集撰者と七巻本筆者両者の、79歌「ながき夜の」の詠に対する解釈上の相違が認められよう。

・83歌「終夜」→94歌「いづれの日」の詠について

83歌「終夜昔の事を見つる哉かたるや現ありし世やゆめ」、90歌「いつまでと長閑に物を思ふらん時のまをだにしらぬ命を」、94歌「いづれの日いづれの山の麓にてむせぶ煙とならんとすらん」の三首はいずれも続詞花集・雑部に収録されている詠で、七巻本・続詞花両集の間に、歌本文の異同は認められない。また、七巻本の筆者は、「こゝろある人の、此世をかならずしも現とはおもひ侍らず」と説き、その例歌として83歌「終夜」を、「仏在世に、一人の善女ありき。（略）善女四の理を立て申侍りけり。（略）彼善女が思ひをなして、あすをまつ事なく、つとめをこなひ給べきなり。されば、心ある人、みなかくぞよみて侍るめれ。」と説いて90歌「いつまでと」を、「誠に今生の身の果、

命のをはりいかゞおぼつかなからずも侍るらん。（略）されば、心ある人、みなかくこそよみ侍るめれ。」と説いて、94歌「いづれの日」を、各々掲げている。七巻本に説くところと比べてみても、両集の間で和歌解釈上の相違は認められない。

● 97歌「はかなさを」、99歌「けふ見ずは」の詠について

右の二首は、七巻本の筆者が「仏法が宝」ということを説くために、諸行無常の譬喩として飛花落葉の詠を四首掲出・例示したうちの二首である。97歌「はかなさを恨もはてじ桜花うき世はたれも心ならねば」の詠は、続詞花集・春下に「題しらず」として収録されている作で、落花の情景を詠じた叙景歌ではある。ただし、下句「うき世はたれも心ならねば」は、「このうき世はいつまでも生きつづけられないことだ」という歎きを詠じているのであってこの一首、現世を無常とする述懐の作といえよう。七巻本の筆者が、97歌を諸行無常の例歌として掲出したのは、下句にこめられている深い歎きに心ひかれたからであろう。また、99歌「けふ見ずはあすやあまし山里の紅葉も人もつねならぬ世に」の詠は、続詞花集・雑下に「世の中ははかなくきこゆるころ、北白河にまかりて、もみぢのちりのこれりけるを見て」という詞書を付して収録されている作である。

即ち、現世の無常を散りゆく紅葉を喩目して詠じた作である。七巻本・続詞花両集に歌本文の異同は認められはするが、この99歌も、「飛花落葉」のこころを詠じた例歌であるといえよう。

● 107歌「この比は」、112歌「おく山の」の詠について

107歌「この比は鶯のうきねぞ哀なる上毛の霜に下のこほりに」は、厳しい寒さの中で鶯の浮寝する様を不憫であるとうけとめて詠じた作である。

ところで、七巻本の筆者は、「畜生道を申さば、残害の苦、しのびがたし」「卅四億種の姿、一つとしてくをうけざるはなし。これならず、夜もすがらもゆる螢、日ぐらしなける蟬、夜もうらむる秋の虫、水にねぶる冬の鶯の、いずれか苦をまぬかる、はある。」と説き、そして、螢（106歌）・鶯（107歌）・蟬（108歌）・蜚（109歌）を詠じた四首を畜生道の例歌として提出している。七巻本に説くところと比べてみると、107歌は、畜生道の例歌としてふさわしい作である。しかし、七巻本の筆者が107歌を畜生道の例歌として提出した理由は、鶯の浮寝する様を不憫であるとうけとめた故であろうか。107歌の作者は、保元の乱の後、讃岐に配流された崇徳院である。鹿ヶ谷謀議の発覚によって、俊寛とともに鬼界が島へ遠島となった七巻本の筆者（康頼）は、それぞれの閨歴の相似から、その崇徳院の心情を理解し、107歌を畜生道の例歌——「残害の苦、しのびがたし」のこころを詠じた作——にふさわしいと判断したのかもしれない。即ち、七巻本の筆者は、続詞花集の部立にとらわれることなく、続詞花集に収録された歌を緻密に吟味したうえで、例歌として掲出していると考えられるのである。112歌「おく山の行衛もしらぬ谷底に哀いつ迄あらんとすらん」は、続詞花集・哀傷に「大式高遠身まかりにける跡に、子息の夢に蛇道におちたるとてよみける歌」という詞書を付して収録されている作である。七巻本の筆者は、この詞書から、この詠を畜生道の例歌として掲出したのである。

・120歌「むねにみつ」の詠について

右の120歌「むねにみつ思ひをだにもはれずして煙とならん事ぞかなしき」は、人道の五苦の一つ「病苦」の例歌として示された十首（ただし、123歌・127歌の五首は恋の病苦の例歌）のうちの一首である。七巻本の筆者は、恋の病苦の例歌を除き、「病苦」の例歌五首を掲出する場合、五首のいずれにも詞書を付している。120歌に付された詞書「れ

いならぬ事、大事になり給ひて、すゞりの箱にかき給ひて、いれ侍りける」は、続詞花集に付された詞書を多少簡略化したものである。⁽⁷⁾七巻本の筆者は、続詞花集を編纂資料としつつも、その詞書を慎重に吟味し、簡明に整理した上で、例歌として掲出していたことが、この120歌の場合からも窺える。

・166歌「つくるとも」→173歌「日をへつ、」の詠について

右の五首は、人道の五苦の一つ「怨憎会苦」の例歌として示された四十首（134歌→173歌）のうちの五首である。七巻本の筆者は、そのうちの一首として166歌「つくるとも又もやけなん菅原やむねのいたまのあらんかぎりは」の詠を掲出している。「家屋を幾度造作してもまた焼失してしまうにちがいない」と詠じたこの作を引いて、七巻本の筆者はこの世の無常を説こうとしている。また、七巻本の筆者は168歌→173歌の六首を掲出することによって、流罪のなげきを説こうとしている。続詞花集から撰出されたこれらの五首は、続詞花集の詞書から判断しても、「怨憎会苦」の例歌としてふさわしい作であるといえよう。⁽⁸⁾

ところで、へ表ーに示した如く、170歌「おち瀧つ水のあはとはながるれどうきにきえせぬ身をいかにせん」の作者は、七巻本では「則長卿宰相」、続詞花集では「前左京大夫教長」とあって、その作者表記には異同が認められる。新日本古典文学大系所収七巻本では、「諸本みな則長と表記。則は教の誤り。」と脚注を付している。貧道集（教長の自撰家集）には、この作、収録されているので、教長の作とすべきである。既に指摘した如く、七巻本・続詞花集の間には五十二首の一致歌が認められる。さらに、以上こころみた若干の考察からも、七巻本の筆者は、続詞花集を精読した上で、七巻本に説くところにふさわしい例歌を撰出していると考えてよからう。その七巻本の筆者が、「教」を「則」と書き誤ることはあるまい。むしろ、七巻本の筆者は、171歌・172歌・173歌の歌本文を若干改めて掲出してい

る如く、170歌の作者表記も意図的に「教」を「則」と書き改めたものではあるまいか。保元の乱で敗走して太秦で出家したものの捕えられ、常陸に配流となった教長。応保二年召還後、仁和寺歌壇をはじめ、幅広く歌界において活動したというものの、配流の中の苦しい体験は、その後の人生に暗い影を宿したに違いあるまい。七巻本の筆者は「教長」の人生に我が人生を投影させ、「教」を「則」と表記することによって、「教長」とはまた別な歌人の作とみなしたかったのではあるまいか。ともあれ、この170歌の作者表記の異同は、七巻本編纂の資料となった和歌集との一致歌の考察が、宝物集研究上の一つの問題点を提起していることを示しているといえよう。

・185歌「萩の葉に」～285歌「ながき夜の」の詠について

右の十六首は、七巻本に人道の五苦の一つ「愛別離苦」の例歌として掲出されている一二首のうちに採りあげられている。

ところで、この一二首の「愛別離苦」の例歌は、生別の歌と死別の歌に大別される。前掲〈表Ⅰ〉に示した如く、185歌231歌は生別の例歌として、253歌～285歌は死別の例歌として、各々、続詞花集から掲出された詠である。これた十六首について、続詞花集の詞書と七巻本に説くところを比べ鑑賞してみると、ほぼ両集の間に解釈上の大きな相違は認められない（七巻本 P.109～P.132 参照）。七巻本の筆者は、七巻本に説くところに適した例歌を続詞花集からの確に掲出している。

ところで、七巻本の281歌～285歌までの五首は、死別の中でも、特に師との別れを主題として、釈迦入涅槃の心を詠じた作を掲出している。これら五首のうちの284歌「かなしさど薪尽けんその人のむかしに今はかはらざりけり」⁽⁸⁾の詠は、続詞花集・釈教に「かまぐらの涅槃会にまゐりてよめる」という詞書を付して収録されているところから、入涅槃

槃の例歌といえよう。即ち、「薪尽けん」は、「如來入於涅槃、如薪盡火滅」⁽¹¹⁾（北本涅槃經）という句をふまえての表現である。また、奥義抄（清輔著）には「薪つきといへるは佛化緣つき入滅し給ふをいふ」と記しているところから、この詠、師（佛）との愛別離苦の情を詠じた作といえよう。また、同じく五首中の285歌「ながき夜のやみにまどへる我をおきて雲がくれぬる空の月かな」の詠は、続詞花集・雜中に「わづらふ比、寂照聖人をむかへて戒うけなどしけるに（略）」という詞書を付して収録されている作——即ち、重病に臥している時に戒を受けた師と死別した小大君の情を詠じた作である。なお、へ表Ⅰに示した如く、続詞花集では「小大君」、七卷本では「よみ人しらず」とある。この詠、小大君集（22歌）・玄玄集（小大君三首・43歌）に収録されていることからも、小大君の作であろう。新日本古典文学大系所収七卷本の脚注では、「よみ人しらずとするのは不審」と注を付している。170歌「おち瀧つ」の作者表記の場合と同じように、七卷本の筆者がこの285歌「ながき夜の」の詠の作者を誤って記したとは考えがたい。七卷本の281歌・前律師慶暹、282歌・光源法師、283歌・慶範法師、284歌・成尋法師というふうに、すべて法師の作である。七卷本の筆者は、入涅槃の歌は、法師の作であることが望ましいと考え、285歌の作者が「小大君」であることを知りながらも、敢えて「よみ人しらず」の作としたもの歟。ともかくも、七卷本の筆者は、「愛別離苦」、特に師（釈迦）との別れの苦を説くにあたり、例歌として女人の作を掲出することを意識的に避けたのであろう。

・314歌「或はなく」〜427歌「こくらくの」詠について

七卷本の筆者は、「仏になる道ひとつにあらず。（略）浄土に往生をすべき道も、十二門をたてて申すべきなり。」「いづれにても、心のひかかんかたをつとめ給はば、皆仏道にいたる道なれば、とくほとけになり給ふべし。よくく信をいたしてつとめおこなひ給ふべし。」と説いた上で十二門——即ち、第一・道心、第二・三宝、第三・持戒、第四・行業、

第五・發願、第六・懺悔、第七・布施、第八・觀念、第九・臨終正念、第十・善知識、第十一・法華經、第十二・稱念弥陀——を開示し、例歌を引いて説明している。¹⁴ 314歌・427歌の二一四首は、その例歌として示された歌である。

〈第一・道心〉 314歌「或はなく」、315歌「たれとても」の詠について

右の詠は、「道心おこし難し」の例歌として示された八首のうちの二首である。314歌「或はなくなきはかずそふ世中にあはれいつまであらんとすらん」は、七卷本系の吉川本・吉田本では作者名「小大君」のみが記され歌本文は脱落しているが、一巻本には作者名・歌本文ともに記されている。続詞花集・雑下に「題しらず」の詞書を付して収録され、七巻本・続詞花両集の第五句に本文の異同が認められる。なお、この詠、栄花物語「見はてぬ夢」にみえる。ただし、歌本文は、七巻本と同じく第五句は「あらむ」。七巻本の筆者は、続詞花集・栄花物語の歌本文を比較・吟味した結果、栄花物語および一巻本の本文に拠ったのであろう。315歌「たれとてもとまりはつべき身ならねどもづはさきだつ人ぞ悲しき」は314歌と同様、続詞花集・雑下に収録された作。ただし、七巻本ではその作者を「成助」、続詞花集では「成保」としている。「成助」は後拾遺集初見歌人、「成保」は千載集初見歌人¹⁵。「成保」の名は今撰集（顯昭撰）に「片岡祝部成保入道」としてみえる。315歌の作者については、遽には明らかにしがたい。なお今後の慎重な吟味が必要である。314歌・315歌は、「夢のうちの栄花なり。まぼろしのあいだの快樂なり。」と、現世の空なることを説く七巻本の筆者の考えに即した例歌である。

〈第一・三宝〉 329歌「けふひらく」、330歌「梅の木」の詠について

七巻本の筆者は、「ふかく三宝を信じたてまつりて仏になるべしと申は、信心をつよくすべしといふ心也。三世の諸仏は、みな仏法僧の力によるがゆへに、道をえたまへり。」「大悲の誓をあふひで、往生極樂をねがひ給ふべきなり。」

「大悲の悲願をあふぎて、来迎接をまち給ふべき也。」と述べて、浄土への往生を信じ求めよと慫慂している。329歌「けふひらくたからのはこのをしでこそ西へ行べきしるし也けれ」、330歌「梅の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけく」となくぞわりなき」は、その例歌として示された二首で、いずれも続詞花集・釈教に収録されている。329歌は「宝篋印陀羅尼經を供養して、極楽へまゐるべき心を人人よみけるに」と詞書にある如く、極楽浄土への往生を詠じた作ではある。330歌は、袋草紙（希代歌）では、「マツシキ女清水寺二百日参、ナクく祈念スル夢ニ（略）」、続詞花集の詞書には「まづしき女のきよ水にとしごろまゐりける、御前になくなくふせりける夢に（略）」というふうにある。七卷本の筆者は、袋草紙の「祈念スル」という詞を、「極楽浄土への往生を祈念する」という意と理解し、三宝（帰依僧）の例歌として示したのか。おそらくこの歌の大意は、本来ならば求め得べくもないもの（浄土に往生すること）を求めようと祈念する心を詠じたものであろう。これらの例は、七卷本の筆者が、袋草紙をも七卷本編纂の際の資料として利用していたことを示す徴表といえよう。

〈第三・持戒〉 345歌「さ夜ふけて」の詠について

345歌「さ夜ふけてぬすまれなくに時鳥き、あらはしつ老のねざめは」は、続詞花集・戯咲に排列されている作である。しかし、七卷本の筆者は、その第二句「ぬすまれなくに」から、持戒・不偷盜の例歌として引いているのであろう。

〈第四・行業〉 365歌「千とせまで」の詠について

右の詠は、続詞花集・釈教に「提婆品」の歌題を付して収録されている作である。七卷本の筆者が「行なくして浄土をねがふは、孝養のものの親を打つがごとし」と説き、また、「昔の大王の、阿私仙の洞の中に千歳つかへ給ひし、行業をばつむとは申べきなり。採薪及菓蔬の心、おほく歌にもよみて侍るめり。」と説いた上で例歌五首を示したう

ちの一首である。なお、365歌「千とせまでもむすびし水も露ばかりわが身の為と思ひやはせし」の第三句、続詞花集では「夢ばかり」、七巻本や千載集・釈教では「露ばかり」とある。

ところで、小泉弘氏は、第二種七巻本の成立は、千載集の成立以前、即ち文治四年（1188）四月二十二日以前であると推定してられる。この推定に従えば、365歌の第三句「露ばかり」は、七巻本の筆者が「夢ばかり」を改めたということになる。いうまでもなく、この詠、法華經の「随仙人 供給所須 採菓汲水 拾薪設食 乃至以身 而爲床座 身心無倦 于時奉事 經於千歲」¹⁸（提婆達多品）をふまえた作である。したがって、第三句は、「露ばかり」（ほんのすこしばかりでも）という本文の方がよからう。ともあれ、いずれの本文に拠るとしても、この詠、第四・行業の例歌といえる。また、俊成は、この続詞花集の詠を千載集に撰入するにあたり、七巻本の本文「露ばかり」や法華經に説くところに拠って第三句を改めたものと考えられる。したがって、右の例から、俊成は、千載集以前に、七巻本を精読していたといえよう。

〈第五・発願〉373歌「さ夜衣」の詠について

右の詠は、「物をねがふには、かなふまじき事をねがふ人、おほく侍るめり。」と説き、その例歌として示された五首のうちの一詩である。続詞花集・恋中に収録されているにもかかわらず、七巻本の筆者は、第五・発願の例歌として掲出している。おそらく七巻本の筆者は、この373歌「さ夜衣隔つることはなけれども身をわけてこそいらまほしけれ」を、かなうまじき事をねがった詠とうけとめ、発願歌の例歌として引用したのであろう。

〈第八・観念〉401歌「我もなし」、402歌「色にのみ」の詠について

七巻本の筆者は、「空観と申は、色即是空の思ひをなして、諸法を空としり、無大無小の観をいたして、一切有と

思はぬなり。（略）この故に、人もむなし、我もむなし、是もむなし、彼もむなし、浄土もなし、地獄もなし。」と説いている。これは、龍樹菩薩の「十二門論」に、「是故有為法皆空。有為法空故無為法亦空。為法亦空。有為無為法空故我亦空。三事空故一切法皆空」⁽²⁰⁾と説くところにも通じよう。

統詞花集・釈教に「心経の心をよめる」と詞書を付して収録されている402歌「色にのみそめし心の悔しさに空し」とける法ぞうれしき」が第八・観念の「空観」の例歌として示されていることは適切であろう。ところで、401歌「我もなし人も空しとおもひなば何か此世のさはりなるべき」は、統詞花集では雑下に収録されている作である。しかし、初句・二句に「我もなし人もむなし」と詠じているところから、前掲「空観と申は」云々の内容にふさわしい例歌と判断し、空観の例歌として掲出したのであろう。七巻本の筆者は、茲に、釈教部に排列されてはいなくとも、釈教歌としてうけとめることの可能な詠のあることを、示していることを確認すべきであらう。

〈第九・臨終正念〉407歌「ほのぐと」の詠について

右の407歌「ほのぐと霞こめたる和歌の浦の春の景色はいかゞ見てまし」は、統詞花集・雑上に収録された、叙景歌とも羈旅の作とも鑑賞できる作である。七巻本の筆者は、「衣通姫の玉津島の神となる、和歌の浦に執をとめし故也。（略）和歌の浦の事、歌にもよみて侍るめり。」と説いている。したがって、和歌の浦を詠じた407歌を第九・臨終正念の例歌として掲出したのは適切であらう。なお、衣通姫が和歌の浦で神として現れた話は、袋草紙（神佛感應歌）に収録された津守國基の詠に付されている文中にみえる。七巻本の筆者は、袋草紙をも精読し、七巻本編纂の際に参考にしたのであろう。

〈第十二・称念弥陀〉427歌「こくらくの」詠について

427歌「ごくらくの蓮の花のうへにこそ露のわがみはをかまほしけれ」は、「浄土をねがふ歌」して例示された五首のうちの一首。無量寿經に説く阿弥陀仏の四十八願を信じて、極樂浄土に往生することをひたすらに願じた作で、第十二・称念弥陀を説くにふさわしい作である。この427歌の作者を、七巻本では「田口重如女」、続詞花集では「山口重如女」としている。このように、七巻本・続詞花両集の間に作者表記の上で異同が認められる。この作者表記の上での異同については、拙稿を参照されたい。⁽²⁴⁾

ところで、宝物集と往生要集とのかかわりについては、すでに先学の指摘していられるところである。⁽²⁵⁾しかし、一巻本には次のように説かれている。

「龍樹并ハ十二之禮ヲナシテ佛ニナリ給」

〈大日本佛教全書本〉

即ち、一巻本の筆者は、一巻本の編纂の時、すでに龍樹菩薩の著作類に注目していたことがわかる。また、七巻本には、「龍樹の礼は十二」「論には十二門論」と説かれている。七巻本の筆者は、この「十二」という数に拠って、十二門開示をこころみたと考えられよう。⁽²⁶⁾

II

以上、七巻本・続詞花集両集の一致歌五十二首を吟味した結果、次のことがいえる。

①続詞花集が七巻本の編纂に利用されていたこと

② 続詞花集を利用するにあたっては、七巻本の筆者は続詞花集の歌本文・詞書さらには作者表記をも慎重に吟味し、改めている場合が認められること

③ 続詞花集から歌を撰ぶ場合、七巻本の筆者は、それら和歌の各作者の詠歌意識や撰集資料として利用した私撰集の部立を尊重するということよりも、むしろ、それらの各歌を七巻本において説こうとするところにひきつけてうけとめ、その例歌として撰びあげていること^⑧

④ 続詞花集の撰者・藤原清輔の著した奥義抄・袋草紙をも、七巻本の編纂にあたって利用していたこと^⑨（調査の結果、七巻本と奥義抄との間には二十八首、袋草紙との間には二〇首の一致歌が、それぞれ認められる。この一致歌をめぐる問題については次稿に発表の予定。）

⑤ これら五十二首の一致歌を吟味してみると、七巻本成立時期の問題と深くかわる異同が認められること

⑥ 七巻本には、「十二門論」（龍樹菩薩造）に説く「一切空」という觀念に通じる表現が認められること

⑦ 七巻本・続詞花両集の一致歌五十二首のうち、166歌「つくるとも」・314歌「或はなく」の二首は、一巻本にもみえること（なお、このことについては、次の機会に考察する。）

このように七巻本とその編纂に利用された私撰集や歌学書類との一致歌の吟味・考察が、七巻本研究上の諸問題にかかわっていることを、茲に確認すべきであろう。

なお、③について補足すれば――

和歌の解釈・鑑賞にあたっては、その作品の詠歌事情・歌題などを参考に、その歌人の詠歌意識をただしく把握し、解釈・鑑賞すべきである。しかし、和歌は、三十一文字から成る短詩型の故に、歌題等をはずしてしまえば、また別

な解釈も生じやすい。例えば、式子内親王や西行の四季部の詠が、爾後の勅撰集や私撰集の雑部に撰入されている場合もすくなくない。次の和歌などもその一例である。

ア今はとて影をかくさむ夕にも我をばをくる山の端の月

(建久五年百首歌・秋、玉葉集・雑五 式子内親王)

イふるさとは葎の軒もうらかれてよなよなる、月の影かな

(正治百首・秋、続後拾遺集・雑上、夫木和歌抄・雑十 式子内親王)

ウ霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見ると問ふ人もがな

(山家集・冬、千載集・雑上 西行)

ア歌は第四句に、イ歌は上句にそれぞれ注目すれば、雑部に収録すべき作としても解釈し得よう。ウ歌は、山家に隠れ住みつつ人恋しい心情を詠じた作として、雑部に収録すべき作ともいえよう。

岡崎義恵氏の、鑑賞を重視する日本文芸学の立場からいえば、四季部の作を雑部の詠とみなして排列することも許容される。しかしながら、第二種七卷本系宝物集の筆者は、続詞花集の釈教部以外に排列されている多くの作を、佛教を説くために、その例歌——即ち、釈教歌として引いているのである。四季部詠を雑部詠とみなすにしても、宝物集の場合と、式子内親王や西行の四季部詠が雑部に撰入されている場合とでは、その理由に、径庭のあることを認めなければなるまい。

注

- (1) 小泉弘著「古鈔本寶物集 研究篇」〈貴重古典籍叢刊8所収〉・和歌大辞典参照。現在なおこの説には異論がある。
 (2) 新日本古典文学大系・付録「宝物集和歌他出一覧」によれば、七卷本・続詞花集両集の一致歌は五十一首となるが、精査してみると五十二首である。

- (3) なお、吉田幸一氏所蔵九冊本では、吉川泰雄氏蔵本に収録されている126歌「くれなるの」、136歌「春ごとに」、126歌「いはるゝ」の三首を欠く。

- (4) 大正新脩大蔵経 NO.475「維摩詰所説経」方便品 P.539 b 18 参照。

- (5) 続詞花集・釈教458歌「爰にきえ」、459歌「いなづまの」、460歌「夢や夢」の三首が維摩経十喩の作として収録されている。
 なお、維摩経十喩の和歌については、國枝利久著「維摩経十喩と和歌——釈教部研究の基礎的作業(六)——」〈佛敎大学研究紀要・第六十四号所収〉を参照されたい。

- (6) 続詞花集・春下に「落花」という詞書を付して収録された詠は、次の一首のみである。

水上落花をよめる 源頼政

芳野河みなどのなみによる花やあをねが峰にきゆる白雲

〈続詞花集・春下・76〉

- (7) 続詞花集の詞書には、「贈皇后宮かくれ給ひにけるあとに、御もののぐともしをさめけるに、つねにつかはせ給ひけるすずりのはこに、かみにかきておかせ給へりけるうた」(哀傷・438)とある。

- (8) 七卷本に掲出された五首は、各々、次の如く詞書を付して続詞花集に収録されている。

・166歌「或人、此歌は一条院御時内裏のやけたりけるをつくられけるあひだ、御殿のうらいたにむしのくへりける北野の御歌となん申す」〈続詞花・神祇・382歌の後に付された文〉

七卷本の筆者は、この166歌に付された文を簡明に整理して、七卷本に利用している。なお、166歌は、袋草紙(希代歌)にも収録されている。

・170歌「遠きくにへつかはされける時、人のもとへいひつかはしける」〈同・雑中・847〉

・171歌「ことありてあづまのかたへまかりけるみちに、京よりあはれなることども申しおくれりける消息の返事に」〈同

・旅・719〉

・172歌「おほやけの御かしこまりて、下野国につかはされける時、むろのやしまを見て」〈同・雑中・849〉

・173歌「みやこはなれとほき所へつかはされけるみちに」へ同・旅・721

七卷本の筆者は、「怨憎会苦と申は、よろづにつけてものの恨をいだくを申ためる也。」と説いている。170歌・173歌の四首は、各々の詞書に記されている如く、京の都を遠く離れねばならない心境を詠じた作である。また、166歌下句には「非業の死をとげた菅原道真の胸の痛みの傷がふさがらない限りはの意」が込められていると、新日本古典文学大系本の注者は脚注を付している。即ち、七卷本の筆者は、七卷本に説く「怨憎会苦」の例歌としてふさわしい作を掲出しているといえよう。

(9) 奥義抄には、170歌と同じく、「おちたぎつ」水面の「あは」を詠じた作が収録されている。

おちたぎつ河瀬になびくうたかたも思はざらめや恋しきものを

(略)うたかたは水のうへにつぼのやうにてうきたるあは也。詞にうたかたということあり。それにそへてよめる也。その言葉はわすられぬことをいふとぞ、ふるき物にはかきてはべる。へ日本歌学大系・第一巻

七卷本の筆者は、170歌を「則長」の作とみなして収録するにあたって、奥義抄に収録された「おちたぎつ」の詠に付された注も参照していたのかもしれない。

(10) 中古・中世には、釈迦入滅の悲しみを詠じた作は多く、しかもそれらは類型的である。

(11) 大正新脩大藏經『涅槃經』NO.111参照。

(12) 奥義抄へ日本歌学大系 第一巻所収へ P.267 参照。

(13) 小大君へ新編国歌大観・第三巻・私家集Ⅰ所収へ・玄玄集へ同・第二巻・私撰集Ⅰ所収へ参照。

(14) 「朝法華、夕念仏」という、平安期の叡山仏教の信仰のさまを示しているが、無量寿経に説く第十八願を尊重した構成ともいえるようか。

(15) 第三種七卷本系伝本の最明寺本・久遠寺本には、作者名・歌本文ともに記されている。

なお、久遠寺本については、北郷聖氏が論稿「久遠寺本宝物集和歌省略考」(青山語文・第18号所収)において考察している。

(16) なお、314歌は、後葉集・雑二(489歌)に「世中はかなき比、人人歌よみ侍りけるに」と詞書を付して収録されているが、小大君集にはみえない作である。

(17) 成助・成保いづれの家集も現存していない。(私家集大成中古Ⅱに「賀茂成助集」へ所収歌数三首)は収録されているが、完本としては現存していない。

(18) 小泉弘著・前掲論稿（注一）参照。

(19) 大正新脩大藏經『妙法蓮華經』NO.262 P.34 参照。

(20) 大正新脩大藏經『十二門論』NO.1568 P.163 C11 行 C13 行参照。

(21) 『統詞花和歌集』釈教部攷へ佛教文学第十八号所収。

(22) 石田瑞磨著『宝物集雜考——三つの問題——』へ「中世文学と仏教の交渉」所収へ・橘純孝著「國文佛教説話集文學の中に於ける寶物集」へ國語と國文学・第十八卷・第十號所収へ・山田昭全著「五、出典をめぐって」へ新日本古典文學大系・寶物集解説へ参照。

(23) 小泉弘氏の調査によると、一卷本系寶物集の伝本・宮内廳書陵部藏本（卷子本）の裏面には、「十二門論疏」が書写されているということであるへ注（一）論稿参照。

なお「十二門論疏」は龍樹の「十二門論」の疏で、吉藏の著したものである。

(24) 湛澄も桑葉和歌抄において四十八願の和歌を説明するにあたり、次の詠を作者の詠歌意識とは無関係にうけとめ、引用している。

題しらず 伏見院御歌

花のうへのくれゆく空にひびきて声に色ある入逢のかね

へ風雅集・春中・203へ

唱導という立場からは、こうした和歌のうけとめ方も必要であつたのかもしれない。

(25) 七卷本には、和歌初学抄（三首）、和歌一字抄（一首）に収録されている詠も、例歌として掲出されている。

（せんこりえこ 佛教大學非常勤講師）（一九九五年一〇月二五日受理）